歌集　ピザのピース

休日の幸せにはやく浸かりたく
正午を前にナポリタン食べる

あぜ草を刈り終えたあとの小麦畑(はた)
こんがりトースト焼き上がりました

ありえないあるかもしれないあるといい
楽しい春のシュルレアリスム展

水張りの田の時にだけ星たちは
自分の姿を見ることできる

羽ばたきのまれなるトビは飛び立つに
いかにも重い　小鳥が見てる

たるみとは居心地よき場羽つくろい
歌をうたえる電線つばめ

風に落つ尺取り虫は全身と
全霊かけて這い上がりおり

自転車で地元をめぐる日曜日
道が敷かれる脳内地図に

戸を開ける　野道の先の三匹が
こちらを向いて尻尾をたたく

黒めがねマスクの女性が伝えてる
「怖くないのに」路上の犬に

核融合反応で光る巨大星(ぼし)
月とおんなじサイズで上る

背たけより高くて大きい棚台の
ボルトを抜けばただの平積み

はがきにも重さ制限いるほどの
言葉で埋まる黒の両面

アスファルトの野の道を行く猫がいて
十字路で止まる順法精神

夏の土手涼しくなればきょうもまた
体育座りのおみな三人

出入り見ぬビルに突入つばくらめ
子の待つ二階へ胸をそらして

視野をゆくものは蚊でなく鳥だった
窓の向こうの雲間のあさひ

異なるを統合したる魁(さきがけ)は
猪木寛至(いのきかんじ)氏われ十代

病床の猪木氏を見てよみがえる
花道で触れた鋼(はがね)のからだ

ひたすらに落ちてゆくのが滝である
だれも咎(とが)めぬその落ちっぷり

沈んだり浮んだりしてまた沈み
滝つぼちりを容易に放たず

新人のまっすぐにして大きくて
ほんとにまぶしい二つのまなこ

スーパーに入れど熊は出るときの
獲物は口にひとつだけなり

水田のなかの一軒戸が開き
黄色帽子の飛び出す朝

富士をゆく大き雲雲われの足
おくれを取りてふんばり直す

雨つづく根を張る草も根本から
ズボッと抜ける全き快感

野の草よ花よ群れるなひとりなら
床の間置くにふさわしいのに

いつか止むきっと止むはず願いつつ
締めねばずっと吹くすきま風

振りぶりを見たいときには隣り家の
壁に面した窓をあけます

もともとは影は光りの意味だった
山に映るは光りだ雲の

未明までの労働終えし吾(あ)を運ぶ
人は目的地まで起きている

電柱の向こうの白雲わが頭蓋（ずがい）
振れば自在に動かせるなり

雨上がり苔むすケヤキを横切りに
すれば抹茶のバウムクーヘン

目の前をガラスの入った額にする
チャンスが多い近眼のひと

野の道を手押し車と日傘ゆく
きょうのキュウリとナス待つ畑に

ご当地のマラソン大会しんがりの
走者が車をしたがえ進む

ボーゲンが身体語であるわたしだが
滑りはじめはピザのピースで

寒ければたっぷりの湯にひたらせて
白いゆだりの釜あげうどん

土手坂の向こうの世界知りたくて
若き猫らの首伸びにけり

百八十三枚でなる単語帳
お気に入りを書きマイ歌レンダー

一枚の絵を壁にして身のまわり
世界を色で構成させる

花散れば苔むすさくらは巖(いわお)となり
土地を押さえる動かぬように

階段のおどり場下の一台の
三輪車きょう二輪となりぬ

空を行く夢をよく見し少年は
川辺に見上ぐ鷺(さぎ)はばたくを

きょう少し凹(へこ)んでいないか冠着(かむりき)よ
なにか心配ごとでもあるか

逆風に向かってカラスは飛び上がり
羽ばたくことなく空の一員

茂りたるヨシの河岸の小石原
だれも見えねどだれかが見てる

お目覚めの野良ねこ青葉を少しかみ
わたしに見えない春を見ている

雲浮かぶ大空統治するものは
わたしのものを想う力だ

水を張り星の光りも積み込んだ
新米わたしの体内照らす

わが歩む足もとめくれば青き宙(そら)
孕(はら)みし月がこっこく進む

心とは澄まないもので沼だという
歩いて走って酸素を入れる

雲のこともっと知りたいそのときは
立体地図を手もとに寄せる

沈む日は自然界にはないという
直線みせて隠れていった

明け星がもうすぐ空の色になる
よそみのあとの見えない存在

大水の行きし河原に春がきて
生者も死者もひかりのそよぎ

木蓮の白き炎上まぶしくて
花びら落ちればたちまち汚れる

かんぜんな平らなら水流れない
ひとの暮らしはすべてが斜面

何のため生きているのか見つかれば
死ぬまできっと生きていられる

お迎えが来ないと後ろに手を回し
野の道行きし媼（おうな）に会いたい

姨捨（おばすて）に暮れる三日月紅をおび
象形文字の作者の気持ち

わが齢（とし）は６３十八青春の
真っただ中にいることにして

十年後もこの階段を上り下り
させるわたしのこの大腿筋

あとがき

この歌集を作るきっかけは、タイトルの言葉が入っている「ボーゲンが身体語であるわたしだが滑りはじめはピザのピースで」（39ページ）が、地元県紙の歌壇で入選したことでした。

子どもにスキーを教えている現場を紹介するテレビ番組で、インストラクターが内股を絞めて前かがみに滑り出すときの感じを、「ピザの（切り身の）ピースの気分で」と子どもに語っているのに触発されました。わたしの子ども時代は、滑り出しから「ボーゲン」。子どもも大好きな食べ物をイメージさせて、転ばずに滑り切れそうなｐｅａｃｅ（平和、無事）の響きもあり、子ども目線の現代的な表現だなと感心しました。入選はそんなに期待していなかったので、「こういうのも短歌なんだ」とうれしくなりました。

生地の歴史文化や自分の生い立ち、郷里の美しい景色を題材に、これまで私歌集を2冊編んできました。3冊目は、短歌って「楽しい」「面白い」、そして「不思議だな」と感じた歌を並べました。

自分の年齢を語るときは、並びの数字を掛け算して言うようにしています。必ず実際の年齢より若くなります。10年の節目はいつも0歳。2024年8月、63歳になり、掛け合わせたら18。それで「わが齢は63十八青春の真っただ中にいることにして」（64ページ）が出来ました。

年を取るのは仕方がありません。それでも考えようでいいこともあります。掲載歌は、実際の年齢に合わせ63首としました。

大谷善邦

大谷善邦（おおたに・よしくに）

夢の作文支援センターさらしな堂代表

信州さらしなの里（長野県千曲市若宮、旧更級郡更級村）に生まれる。進学のため上京。共同通信社に就職。文化部の記者として「高齢社会問題」を担当したとき、郷里の冠着山（かむりきやま）が姨捨山（おばすてやま）の異名を持つ理由に関心を持ち、さらしな・姨捨の歴史文化の掘り起こしを始めた。2021年定年退社。新聞記者の経験を生かし、伝えたい思いを自分の言葉で綴るのをお手伝いする作文支援業を営む。「月の都」として日本遺産になった千曲市の魅力を発信する住民団体「さらしなルネサンス」会長

著書に「地名遺産さらしな」「白　さらしな発日本美意識考」「歌集さらしなのうた」「フォト歌集 ひかりのキャンバス」。制作をお手伝いした絵本に「たぬ平とハクビシン」（中村玲子著）「チュンのあさごはん」（同）。「あんず姫ものがたり」（石坂まち子著）など

2020年、短歌結社「コスモス短歌会」に入会

歌集　ピザのピース　さらしなのうたⅢ

発行　2024年12月12日

著者　大谷善邦

制作　夢の作文支援センターさらしな堂

〒389-0813　長野県千曲市若宮1184-6

（旧更級郡更級村）